

2015年7月12日メルボルン日本語キリスト教会 主日礼拝メッセージ

柏倉 秀吉

聖書：創世記1：1－2

タイトル：「初めに神が」

---

聖書はこの箇所から始まった。

1節「初めに神が天と地を創造した」

この初めの一節だけで、誠の創造神の存在と、そして聖書とは人間が作り出したものではないことを気付かされる。

一方、天地創造の物語は、古代から今日でも真実を追い求めて多く議論されている。

モーセ以前の古代記述のなかで、創造について記されている物の一つに、古代バビロニアの創造神話「エヌマ・エリシュ」がある。

「エヌマ・エリシュ」とは、「まだ上に天は名づけられず、下に地がその名を呼ばれないとき」という意味で、天も地も存在していない、そういう原始時代のことを述べている創造神話のことである。

その中心的な話は、海の女神ティアマットと嵐の神マルドゥクとの戦いであるが、

この戦いに勝利したマルドゥクが戦いで混沌となった世界に秩序を作り出し、更には人間をも作り、この地を創造したという内容である。

また創世記1:2の「大水」という言葉は、「テホーム（ヘブル語）」だが、これはこの海の女神の「ティアマット」が変形した言葉であるとも議論されている。

これは、古代オリエント全般において神話のパターンとして普遍的な下敷きになっていると主張されており、この創世記に関する神学的な議論の中には、モーセは、モーセ以前にも存在していたこの古代バビロニアの創造神話を土台として、それを基にモーセが編集したのではないかと議論され、実際それを基に翻訳されている聖書もある。

それゆえ、創世記1:1「初めに」というのは、どこからの「初めに」なのか。また「神が」とは、どの「神が」なのか・・・と、その議論は古代から今日まで尽きない。

だからこそ、私達はまず初めに、聖書が「初めに神が天地を創造した」と、断言していることをそのまま信じるということが必要である。

誤解が無いように、それは歴史、文脈、言語、文化背景、また科学的などを確認しないということではない。そうしたことを日々確認しつつ、「初めに神が天と地を創造した」という聖書の真理に、きちんと立つ！という純粋な信仰が大切なのである。

そうした信仰の確信を持たずに聖書を読んでいるのは、今日の議論に巻き込まれ、「いったいこの聖書の意味は何だろうか？」と不信に陥ってしまうこともある。

では創世記1:1「初めに」というのは何か。

それは人間側からの「初めに」では無く、「神が」はじめられた、この世、この世界の事始めの「初めに」である。

ヨハネ17:5でイエス様は「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」と言っている通り、神は、この「初めに」という前から存在されているお方である。また、「あの栄光で」ということは、栄光をたたえる存在も既にあったことが伺える。

言い換えれば、偶然の連続で、たまたま出来たことではない。同時に誰かによってつくられた神話からのものでもない。

神はなぜ「初めに」をはじめられたのか。

それは何より人間のためにはじめられたということである。

この天地創造のクライマックスは、何より人間を創造したということである。(創世記 1:26-27 参照)

神は人間を特別なものとして創造された。それは神が「初めに」の前から、既に私達を含むすべてに対するご計画を持っておられたということである。

パウロは、エペソ 1:4 で「すなわち、神は私達を世界の基の置かれる前から彼にあつて選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」と記している。

神は、既に私達が存在する前から私達を選び、御前に聖く、傷のないものとして祝福を与えようとしていたというのは、本当に驚くべきことである。

神は、それほどまでに私達を愛し、祝福を与えようとしてこの世界を「初めに」と、はじめられたのである。それがこの創世記 1:1 の「初めに」である。

逆を言えば、この神の愛と祝福を無視して、この世界が自分たちのものであるかのように、神から離れて生活するならば、祝福を見失っているとも言えよう。

この「初めに、神がこの天と地を創造された」の御言葉の祝福の内に留まりたい。

創世記 1:2 「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。」

「茫漠として何もなかった」という言葉は、トーフーとボーファー（共にヘブル語）の二つの単語をつなげた言葉である。

茫漠の「茫」とは「だだっ広い」という意味があり、「漠」は砂漠のバクで「何もない」ことを意味する。

それは「だだっ広くて何もない状態」。言うなれば草木一本、生命を保つことが 1% の可能性もないことを意味している状態である。それが「茫漠として何もなかった」の意味である。

次いで「やみが大水の上にあり」とある。

「やみ」と「大水」とは、どちらも災いをもたらすものとして、聖書は記している。

「大水」とは「テホーム(ヘブル語)」という言葉だが、通常、地下水を意味する。しかし、この 2 節では、創世記の特別な状況の中で、その地下水(「大水」テホーム)が地の表にまであふれ出ていわば洪水状態になっているような状態のことを意味している。

すなわち、この地球の初めは、「茫漠として何もな」く、「やみが大水の上に」と、生命が誕生できる可能性がない、私達にとっては絶望の状態である。

そうした中、「神の霊が動いていた。」のである。

この「神の霊」とは、「神の風」、「神の息」とも訳せる言葉だが、ヨハネ 3:8 で「風は思いのままに・・・」と、実に自由である。神ご自身だけは、こうした絶望の中であっても、実に自由に、何の制限もなく、そして思いのままに、見事に、また圧倒的に、ご臨在されているお方である。

私達の信じる主は絶望の淵でも圧倒的なお方なのである。

私達は、この神に、永遠の計画を持って愛され、祝福され、聖く、傷のないものとして召されているのである。

神は、どんな状況(過去、現在、未来において)であっても私達を見放すようなお方ではない。

この神にのみ唯一の希望がある。この祝福、希望、神の愛を見失って、私達は、どこに行くことができるか。

しかし神はなぜ、あえて「茫漠」からこの世界をはじめられたのか。

その答えは 4 つある。

①被造物の不思議を通して人が神を探り求めるためである。

使徒 17:27、ロマ 1:20

②被造物を通して人の無力さを知り、神の御前にへりくだり成長するためである。

ヨナ 2:2-9

③被造物を通して規則性と秩序を学び、人が互いに支え合う社会を築くためである。

ヤコブ 5 : 7

④そのすべてを通して神と交わり、恵みと祝福と愛を学び、変えられて行くためである。

ロマ 5:15、ロマ 8:35-39

全てをご計画して「初めに」をはじめられた主の祝福が皆様の上に豊かにありますように。